

今年もまた、就職の季節がめぐって来た。来春に卒業をひかえた、神戸大学の四年生諸君、特に、六甲三学部の秀才諸氏は、

心落ち着かぬ日々を、過していることであろう。戦後最大といわれる日本経済の不況事態も、その不安に拍車をかけているに相違ない。日本合衆界の最大メーカー、東洋レーヨンが、大卒新規不採用の方針を決定したという情報は、相当の衝激を求職学生に与えるものであったといえる。そうでなくとも、焦慮と不安に心痛める就職期に、暗い影をもつ材料が、今年には、はやと出揃いすぎた観がある。大会社への就職、そして経営者への途を邁進し、安定した生活を送る。このきわめて美しく、堅実な夢を、一六年の学問生活で育んできた、六甲三学部の秀才諸氏は、しかし、そんなことは、決して挫折したりしない

だろう。おそらく、来春卒業迄には、百分の就職率で各々、世界の春を謳歌できるにちがいない。

つい先日、大阪は梅田の、O.S.ながしという洋酒喫茶で、新調の背広にベリッと身をつつんだ、新B・M(Business Man)の略、B・Gは周知の通りDress Girlの略、最近ではOffice Ladyなる新語が出現したと聞いている。念のため、らしき一見して秀才とわかる、眉目秀麗のおのこ三人の会話を小耳にはさむ機会を得た。序にいうなら、このおのこたち、奇しくも、神大経・経・法学士であったのだ。面白くもなるともないが、何かの参考のため、ブライバシー侵害にならぬ程度に引田してみた。

「俺はちょっとバテ気味や」
「……」
「講習してしんどかったわあ、一月間、ソロバン・簿記からタイプ・英会話・商業英語・実務知識、ぎっしり詰めこまれたわ、ぐったりしたで。」

「ふうーん、俺ら半分遊び気分やったけどなあ。麻雀したり酒のんだり、寮に掃ったらずきかっつてや、講習に出て、大半居眠りしとったわ。」
「やっぱりメーカーで楽なんかな。その点商社はきついのう、給料は安いし。」
「銀行もしんどいでえ、俺らの課の残業の多いこと、いやになるで、今月になって仕事始めたところやのに、もう十時間以上の残業やで。」
「俺もそうや。また営業部いうたら、残業せなあかんようになってるんや。商社で人が資本やのに、酷使する傾向あるな。」

「商社やったら営業いかんと思味ないやろ。それに外国行く楽しみあるからええやないか。」
「外国行くには海外渡航試験うからんと、あかんやろ。これがしんどいんやなまた受験勉強みたいなんや。」
「どんな仕事やらされとんね」
「今は勿論、デリバリー(受渡……筆者註)や。二年はやらされるらしいで。毎日伝票きつたり電話かけたたり、ソロバンいれたり、てんてこまいや。女の子でもできる、しょうもない仕事や。」

「女の子のできる仕事いうたら俺のやつとるのもそやで、最初はどこでもそうやろ。」
「女の子どもでできる仕事いうたら俺のやつとるのもそやで、最初はどこでもそうやろ。」



「ところで、お前んとこのメッチェンどうや、美人おるか。」
「それがあかんね……」

以下は打ち切るのが、高潔な読者諸氏に対する礼儀であろう。彼らは、既に、一人当てハイボール三杯・ビール二本は、胃袋に流しこんでいたことは明白であった。蛇足ながら、神大生がよく行く「どん底」あたりの値段とは格段の差があることに、注意すれば、一流会社のB・Mたるブライドは決して楽ではないにちがいない。さて、読者諸兄、ここに引用した部分が、彼らの会話の最も主要な部分であったことを、筆者は指摘しておく。

就職戦線異状なし

く義務を感じる。ついに一言たりとも、マルクス・ヘーゲルはおろか、ケインズ・ストレーチ……小林喜楽・柚木馨諸教授の学理・学説を、聞くことはできなかつたのである。ましてや、ヴェトナム戦争の激化を憂えたり、農地報償法案成立を憤ったり、そんな感じは言外にすら、なかつたようである。「どん底」あたりで、トリスハイボールを飲みつつ闘わしている深遠複雑な諸論争の当事者とは、ひょっとして、人種が別であったかもしれない。あるいは社会人たるもの、青臭い論争などしている暇がないのかもしれない。石を投げると大学出に当たる文明国のこと故、むやみにインテリぶるのは、テレくさいのかもしれない。

経営学士・経済学士・法学士の資格証書は、黒い七〇円の筒に納まって、どこか金庫の底に

秘めてあるのだろう。なんともはや奥床しい限りではある。去年の今頃、就職内定者の中には、大学の学問に倦きたのか、既に究めつくしたのか、英会話あるいはソロバンを熱意をこめて、学びに行つた者もあると聞く。

それかあらぬか、神大卒の就職状況、きわめて好調。入社後の成績も抜群の者が少なくないようである。
神戸大学六甲三学部の秀才、まさに健在なり。就職の不安を、在学生一同きれいさっぱり、どこかの溝に洗い捨てて、落ちついていればよろしかろう。ヴェトナムという異国の空の出来事は気に病む必要さらさらなし。先輩の歩んだ途を、さらに上手に歩めば、第二・第三の出光某・椿本某・越後某の出現は、決して夢ではないだろう。

下にあつて、何が不満なのか、ある元学生運動の活動家のA氏は、二年間勤務し、将来を約束された会社を辞め、教育学部に復帰した。つい最近のことである。

「安保闘争を経験し、思想的な苦悩を経験したら、会社勤めの安逸さが、つくづくなげなくなってなあ。勿論、会社に残って、発言権をもつため頑張るのも一つの途やろけど、個人の問題として考えたら、やっぱりこれが生き甲斐やと主張できるような職業につきとってな。教師になるためもう一度勉強しなおしするんや」
とは彼の心境を語つた言葉である。ちなみに、彼は、経済学部在学中秀才の誉れたかかったことを附言しておく。人様々、ほんとうの人生を雄々しく生きぬくのは果してどちらだろうか。(よしかわ こういちろう)